

# 家庭学校酪農班の仕事について

## 100年の歴史

北海道家庭学校は大正3年(1914年)に設立され、その翌年にホルスタイン2頭を導入し酪農部(現在は酪農班と呼称)を始めました。当時はまだこの地域で酪農は行われておらず、先駆的な取り組みでした。以来100年を超えてその営みを続けており、歴史を重ねて現在に至ります。

## 子ども達との作業

北海道家庭学校は児童自立支援施設です。様々な課題を抱えた子ども達が親元を離れ、敷地内に点在する寮舎で自立のための生活をしています。その中で職業教育の一つとして酪農班は位置付けられています。職業教育と言っても高度な酪農技術を教えて一人前の酪農家を育てるのが目的ではありません。酪農業を数ある職業の中の一つとして捉え、働く姿を子ども達に見せるのが私たちの役割です。



家庭学校には酪農の他に山林や畑作などを担当する部門があります。それぞれが作業班と呼ばれ、1週間に3回、午後の2時間程度実習をします。それは小中学校の授業の一環として割り当てられており、その時間、酪農班では公立学校の先生と数名の生徒と牛舎の作業を行ったり環境整備などをしたりします。

## ゆとりのある放牧酪農

牛舎には搾乳牛で20数頭、全頭数で30~40頭程度の乳牛が居ます。近年の一般的な酪農家から見ると小規模ですが、常時2人体制で搾乳から哺育、育成、草地管理までを行うにはちょうど良いワークライフバランスを保てる規模ではないかと思っています。

当施設は山林を含む敷地のほぼ全体が平和山という一つの山でなりたってい



ますが、その山肌の一角に牛舎と放牧地が広がっています。その斜面は畑作や採草地には向かず、長年放牧地として利用してきました。近年では省力的でエコロジカルな飼養形態として放牧を選択する酪農家が増えていますが、家庭学校では設立当初からほぼ一貫して放牧酪農を行ってきました。

高乳量を追求して改良された現代の乳牛はいきなり牧草地に放してもうまくいかないことも多いのですが、私たちの乳牛は長い年月の中で自然に放牧に適応してきました。そのため、1頭あたり年間乳量は6500kg程度とあまり高くないのですが、一般的な農家より2倍長生きします。高泌乳牛によく見られる第四胃変位などの周産期病はほぼ無く産後起立不能による廃用もここ数年ありませんので、獣医対応に時間を取られることも少なく、精神的疲労もあまりありません。牛を健康に飼い治療にかかる費用を抑え、長生きさせ生涯乳量を確保することで経済的な採算を合わせるというのが私たちの目標としているやり方です。

私たちは最新鋭の技術を使って近代的な生産を行うよりも農業者の理想の姿として牧歌的でゆとりのある生活を送ることを望んでいます。もちろん時には苦しいことや辛いこともあります。放牧地でのんびりと草をはむ牛たちを眺めていると時間がそれを解決してくれることがほとんどです。

## バター・チーズの製造、販売

牛舎には子ども達が毎朝、その日に飲む牛乳を取りにきます。今年はバター・チーズ工房も完成し、自家製の乳製品も食卓に並べられるのではないかと思います。長年の夢だった乳製品の本格的な製造・販売も、この夏からいよいよ始める予定です。



家庭学校の子供達に都会では決して体験できない「家畜のある暮らしと空間」を提供するのが私たちの仕事です。

[平成31年4月1日 担当：夙本賢治]